学校教育実践学研究，2008，第14巻，39－53頁

大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究報告Ⅱ

小原友行・深澤清治・朝倉　淳・神山貴弥・岩城宇紀*・中井俊之*・
森　俊郎*・淺野博子*・大村正樹*・庄野修一*・矢野和佳子*・
鷲見勝司*・吉浪徳香*・小野智子*・榎並愛子**

（2007年12月3日受理）

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students in Elementary / Secondary Schools in the United States (II)

Tomoyuki KOBARA, Seiji FUKAZAWA, Atsushi ASAKURA, Takaya KOHYAMA, Takanori IWAKI, Toshiyuki NAKAI, Toshiro MORI, Hiroko ASANO, Masaki OMURA, Shuichi SHONO, Wakako YANO, Katsushi SUMI, Norika YOSHINAMI, Tomoko ONO and Aiko ENAMI

Abstract. This is a second year's report on overseas teaching practicum by Japanese graduate students in elementary / secondary schools in the United States in September 2007. It awaits no discussion that future teachers need to develop enhanced awareness and skills in teaching young global citizens in the future. For this purpose, Global Partnership School Center, Hiroshima University, conducted a second-year overseas teaching practicum by education-major graduate students in the United States. Reviewing the teaching practices and the participants' self reports, it was found that this innovative opportunity helped them raise their cross-cultural awareness and gain confidence in teaching.

1．はじめに

本論は，昨年度（小原ら，2007）に引き続いて行った，広島大学大学院教育学研究科博士課程前期学生および現職小・中学校教員によるアメリカ合衆国ノースカロライナ州の公立小・中学校における「体験型海外教育実地研究」の第2報である。

「体験型海外教育実地研究」のプログラムは，米日財団の助成を受けて2005（平成17）年4月に設立した広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター（略称はGPSC）によって企画・運営されたもので，広島大学大学院教育学研究科とノースカロライナ州グリーンビル市にあるイーストカロライナ大学教育学部との間の長期にわたる国際交流を通して培われた信頼のネットワークを土台として可能になったものである。またそれは，広島大学でのアメリカの小・中学生に日米の文化の相互理解を図るための教材研究，アメリカ合衆国の小・中学校での授業観察および英語による授業実践，帰国後の事後研究による教材の完成とレポート作成という，国際交流型およびアクションリサーチ型のユニークな教育実習の取り組みである。

本プログラムの最大のねらいは，将来教員を目指している大学院生や現職派遣の大学院生，そして現職教員の希望者に対して「体験型海外教育実地研究」を行い，それを通して彼らにこれからの時代の教員に求められるグローバルな資質や能力を育成するとともに，異文化間コミュニケーションを重視した高度な実践的指導力を養成することである。以下では，本年度の本プログラムの概要，参加者それぞれの学習成果と自己変容，そしてプログラムの評価（授業について，アンケート結果から）について紹介していきたい。

*広島大学大学院教育学研究科博士課程前期大学院生，**東広島市立三ッ城小学校

2．体験型海外教育実地研究プログラムの概要

本プログラムの計画および訪問校，参加者は以下の通りであった。

1）期　間　平成19年4月～12月

2）訪問先　米国ノースカロライナ州内の小学校及びニューヨーク市

3）訪問目的　広島大学大学院教育学研究科授業科目「体験型海外教育実地研究」の実施及び学校間国際交流の推進

4）スケジュール

4／11（水）　履修等，説明会

5／31（木）　オリエンテーション

6／8（金）　講演会「米国における初等教育教員養成と小学校教育事情」

6／9（土）　GPSC第3回学校間国際交流フォーラム（広島ガーデンパレス）

7／5（木）　第1回事前研究　個別研究テーマ（授業実践研究）の設定・日本文化の紹介について内容と方法の打ち合わせ

8／2（木）　第2回事前研究　個別研究テーマ（授業実践研究）の交流と協議・日本文化の紹介について内容と方法の打ち合わせ

8／30（木）　第3回事前研究　個別研究テーマ（授業実践研究）の交流と協議

9／11（火）　第4回事前研究　旅程確認・諸準備・日本文化の紹介について内容と方法の打ち合わせ

9／15（土）　広島発・経由地・グリーンビル着

9／16（日）　事前打ち合せと準備

9／17（月）　各校での実習（授業実践研究）

9／18（火）　各校での実習（授業実践研究）

9／19（水）　午前　ローリーへ移動
午後　デューク大学訪問

9／20（木）　Exploris Middle Schoolでの実習（日本文化の紹介）

9／21（金）　午前　ニューヨークへ移動
午後　海外教育実地研究（フィールドリサーチ）

9／22（土）　終日　海外教育実地研究（フィールドリサーチ）

9／23（日）　ニューヨーク発

9／24（月）　成田経由・広島着

11／1（木）　事後研究1　成果報告会

12／11（火）　事後研究2　成果報告会

5）参加者およびグリーンビルにおける配置校

Elmhurst Elementary School

Ms. Suzanne Hachmeister（パートナー校教員）・神山貴弥（引率教員）・中井俊之・森俊郎・淺野博子・榎並愛子

Wahl Coates Elementary School

Ms. Cynthia Watson（パートナー校教員）・深澤清治（引率教員）・庄野修一・矢野和佳子・鷲見勝司

G. R. Whitfield School

Ms. Pam Justesen（パートナー校教員）・朝倉　淳（引率教員）・大村正樹・吉浪徳香・小野智子

3．参加者の報告

参加者は，現地配置校において，それぞれ事前研修を通して準備した授業を実践した。以下には各参加者が著したこの授業に関する「ねらい」「概要」「成果と課題」，およびこの海外教育実地研究を通してもたらされた「自己変容」についての報告を掲載した。

写真1　参加者による授業実践の様子

写真2　参加者による日本文化の紹介の様子

第４学年　図画工作「Paper Plane」

広島大学教育学研究科学習科学専攻学習開発専修　中　井　俊　之

１．ねらい

本授業のねらいは，折り紙で紙飛行機を作ることを通して，一枚の紙が持つ多様な可能性を知り，日本の文化に興味を持ってもらうことである。今回の授業を考えるにあたり，アメリカには紙を丁寧に折ると言う習慣がないため比較的製作時間が短いこと，興味を持ちやすいようにユニークな形（リング型）であること，全員が完成でき飛ばすことができるように単純な構造にすることを考慮した。

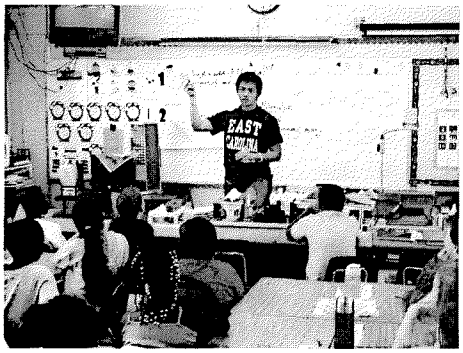
２．概　要

はじめに，授業で取り扱う紙飛行機を提示し，それが何であるかを少し考えさせた。一般的な紙飛行機とは形状が異なっているので，子どもたちは実際に飛行機が飛ぶ様子を見せるとかなり興奮した様子で興味を持っていた。

次に，子どもたちに紙を１人一枚配り，製作に移った。製作の際に，教室前の黒板に製作工程を子どもたちが使う紙と同様のもので一段階ずつ示した模造紙を提示し，さらに子どもたちの紙のサイズの10倍程度の大きさの教師用の紙を用意し，全体に作り方を示すための見本となるようにした。模造紙で工程を一つずつ説明し，大きな見本を持って全体を回りながら，できていない子どもの補助を行った。製作工程を一段階ごとに全員ができたかを確認し，次の工程へと移った。

全員が完成した後，教室の外に出て飛行機を飛ばした。最後にまた教室に戻り，その他の紙飛行機（スペースシャトル型，竹とんぼ型など）と示し，すべてがどこにでもある紙一枚で作ることができること，紙の持っている可能性には限りがないことを伝えて授業を締めくくった。

３．成果と課題



アメリカでは折り紙という文化がないため，日本の幼稚園児くらいであっても作れるくらいの単純な構造の飛行機を取り上げたが，製作工程を示すための英語の説明が細かく，小学生に言葉で伝えるのは苦戦した。日本語の「折る」という行為が英語の“fold”という言葉だけでは上手く通じず，角と角を合わせて丁寧に折るというニュアンスが伝わらなかった。折り方を教えるというより，「折ってあげた」という場面も多々あった。もう少し，わかりやすい説明を示すことができればよかったと感じている。授業後に知ったことだが，訪問先のノースキャロライナ州はライト兄弟が初めて有人動力飛行を成功させた地でもあり，街中を走る車のナンバープレートには“First Flight”の文字が記されているほどである。その点を紙飛行機とつなげて考えることができれば，また別の授業の展開ができたかもしれない。また，はじめに紙飛行機を見せたときの子どもたちの驚く様子と風に乗って自分たちの作った紙飛行機が風に乗って飛んでいく様子に興奮している子どもたちの姿が印象に残っている。

【自己変容について】

本研修では，学校訪問の際にアメリカの教員志望の学生たちと意見交流するという貴重な経験ができた。アメリカの学生が日本の教師の仕事量に驚愕していた姿が印象的であった。学校の制度や文化など日米の教育における違いを感じたり，日米の教師の子どもに対する思いを双方の教師が語り合い，同じような思いを持っていることを知ったりすることで，私自身の教育に対する視点が深まったと思う。

第５学年　異文化理解「Japanese culture FUKUWARAI☆」

教育学研究科学習科学専攻学習開発基礎専修　森　　俊　郎

１．ねらい

本授業のねらいは，日本の伝統的な遊び，福笑いを体験することによって，日本文化に興味を持つとともに，日本人とアメリカ人が，共に笑い合える関係であるということを実感できることである。

福笑いは日本の伝統的な遊び文化のひとつで，「笑う門には福来る」との言葉のように遊ぶことで笑うことができる。また，顔のパーツや上下左右の指示などの簡単な言語で取り組むことができるため，異文化間であっても子どもから大人まで十分に楽しむことができる。日本文化を紹介することを通じて，子ども達に日本との交流に対してポジティブな感情体験をしてもらいたかった。そのポジティブな交流体験がグローバルマインドにつながると考えたからである。

２．概　要

授業は，まず，FUKUWARAIの紹介をした。教師がオカメの仮面をかぶり，登場し，自分の顔のパーツ（眉毛，目，鼻，口，ほっぺた）をつけるのを忘れたという設定で寸劇をしながら，のっぺらな顔に，顔のパーツをくっつけるという取り組みを提示した。出来上がったオカメを福笑いという日本の伝統的な遊びの，代表的な顔であるということを紹介した後，見本として全員の前で実際に，代表の児童一人に福笑いを遊ばせた。

児童が福笑い遊びのルールが理解できたところで４人１グループになり，それぞれの顔の輪郭に合わせ，創意工夫をこらし，顔のパーツを作る。１人１パーツを基本とし，完成し次第，ゲームに取り掛かる。

各グループ福笑いで用いる顔のパーツを完成させ全員が目隠しをして取り組むことができた。最後に，本日の授業の振り返りとして，感想シートを書かせた。

福笑いを楽しむ子どもたち

３．成果と課題

笑い・楽しむという感情に関して，人間の文化差があまりないためもあってか，児童たちは福笑いを存分に楽しむことができていたように感じる。また，ゲームに取り組んでいくにつれ，「ひげをつけていいか？」や「アクセサリーをつけていいか？」などの質問が出て，児童の意欲的に取り組む姿を見ることができた。授業の感想シートには，「fun」や「exciting」，「enjoy」などが書かれてあった。その他には，「いく日本‼（日本語）」など日本に興味を示す内容が多く書かれてあった。また，教師に対して，「my friend」，「see you again」など我々訪問者と交流ができたことを喜ぶ感想が多く書かれていた。総じて，福笑いを楽しむことを通じて，日本に興味を持つこと，ポジティブな交流体験を多くの児童ができたと考えられる。しかし，授業の後半に，グループでの活動が遊び終え，落ち着いた印象を受けた。自身の授業の課題と感じられるのは，グループでの活動時間を十分にとろうとした結果であったが，授業後半では，臨機応変に，各グループでおもしろい顔を発表し合うなどしてクラス全体の交流を行ってもよかったと考える。

【自己変容について】

訪問先での一つ一つが自分にとって新鮮で考えさせられることが多かった。当然のことではあるが，子どもたちのことはじめ，教育に関してアメリカと日本で共通するところ，そして異なるところがあった。訪問先のみでアメリカの教育と考えてしまうのは大きな誤解をしてしまうことも多いであろうし，自分の中での日本の教育と比較して考えてしまうのも誤解を生じる。アメリカにももっと色々な教育のあり方があろうし，日本にも色々な教育のあり方があると思う。今回の訪問で，教育の普遍性，そして多様性を改めて感じることができた。

第３学年　異文化間教育「Let's communicate by gesture!」

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修　淺　野　博　子

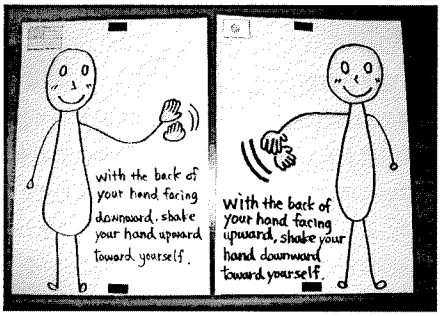
１．ねらい

本時は，コミュニケーションを図る手段の１つとしてジェスチャーに着目させ，日本とアメリカにおけるジェスチャーを比較し，その共通点や相違点に気づくことをねらいとしている。またそうした比較やアメリカのジェスチャーに関するカードを制作することを通し，自文化を見つめ直す機会とすることができるのではないかと考えた。

２．概　要

授業の導入では，本時のテーマを示すとともに，ジェスチャーを使った伝言ゲームを行い，ジェスチャーがコミュニケーション手段の１つであることを確認させた。

展開の前半部分では，文化間のジェスチャーの違いに気付かせるための紙芝居を提示した。そして，日本とアメリカのジェスチャーを比較させるため，日本のジェスチャーを描いたカードを紹介し，それがどういう時に使われるジェスチャーなのか想像させた（写真）。また，それぞれのジェスチャーについてアメリカと同じであるか，それとも違うものであるかを確認し，表に整理していった。紹介の最後には特におじぎについて取り上げ，その背景や意味などについて説明した。その後，児童は「アメリカのジェスチャーを日本の子どもたちに紹介しよう」という目的のもと，ジェスチャーの絵とその意味を書いたカードを作成した。



最後に，本授業のまとめを行うとともに，「他にも日本とアメリカで同じものや違うものがないか探してみてほしい」「自分たちの文化に誇りをもってほしい」というコメントをし，授業を終えた。

３．成果と課題

日本のジェスチャーとアメリカのジェスチャーを比較するところでは，児童はアメリカのジェスチャーを通して日本のジェスチャーの意味を考えるなど，実によく想像し，多様な意見を出していた。日本のジェスチャーという「知らないもの」を想像することは，児童にとっては難しいものであったと思われる。実際の授業では，教師がヒントを出すなどして児童の想像を促したが，両者の比較の仕方をよりよいものに改良することが今後の課題である。また，授業の後半で児童が作成したカードには，授業で扱ったジェスチャーを自分の絵や言葉で書き直しているものと，授業で扱ったジェスチャー以外を書いたものの２種類があった。前者を示した児童は，本時の内容をよく理解し，おそらく日本にも自分たちと同じジェスチャーがあることや，また一方で異なるジェスチャーがあることに興味を抱いたのだろうと思われる。また後者の児童は，本時の理解に加え，自分の生活を振り返りその中からジェスチャーを見つけており，本時の活動が自文化の理解にも繋がったと考えられる。さらに，児童の中には表情といったジェスチャー以外の非言語に注目している者もおり，児童の視点の広がりを感じることができた。授業の中ではできなかったが，これらの作品を使って日本の児童と交流できるとよりよい実践になると思われる。

【自己変容について】

今回の研修では，私個人の意見を求められる場面が多くあった。自分の思ったことを述べればよいと言われるとなんだかとても簡単なことのように思える。しかし日頃から興味・関心をもって物事を見ていないとなかなか自分の考えをもてないということに気がつき，さらにはそれを表現することの難しさも痛感した。だが，様々な人々と関わる中で，自分のことをもっと知ってもらいたいと思ったり，相手のことをもっと知りたいとも思うようになった。そしてそのためにはやはり自分の考えをもちそれを表現することで，相互の関係をよいものにしていくことが大切であると感じた。

第５学年　社会科「色々な地図」

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修　大　村　正　樹

１．ねらい

本授業のねらいは，アメリカ大陸が中心に描かれた地図と，日本列島が中心に描かれた地図と，北半球と南半球が逆になっている地図を見比べることを通して，世界には様々な見方があることに気付けるようにすることである。

２．概　要

まず，授業の冒頭に授業者の自己紹介をして，日本から来たということを説明した。そこで，アメリカ大陸が中心に描かれた地図を提示し，両国の位置を確認させたところで，日本が中心に描かれた地図を提示した。「この２つの地図の違いは何だろう」という発問をし，中心に描かれている国が違うことを押さえた上で，「どうして色々な地図があるのだろう」という学習課題に繋げた。ここで，各自ノートに意見を書かせて，全体の場で共有した後，南半球が上に描かれた地図を提示し，今までのものと比べて上下が逆になっていることを確認した上で，今度はどこの国が使っている地図が発問した。最後に，今日扱った３つの地図以外にも色々な地図があるが，世界の人々は共通した１つの地図を使う方がいいか，それとも異なった種類の地図を使う方がいいかを尋ね，再度各自ノートに書かせた上で，全体の場で交流して，まとめにあてた。

３．成果と課題

導入の自己紹介から２枚の地図を見比べて，「片方の地図は日本が端にあるけれど片方の地図はアメリカが端にあって日本が真ん中にある」という言葉は子どもからでてきたが，「どうして色々な地図があるのだろう」という発問については，考える観点を与えなかったので，どのように自分の意見を書けばいいのか戸惑う子どもが何人もいた。更に，上下が逆になった地図はどこの国で使われているかという発問については，それまでの発問と比べていきなり難しくなったため，「アメリカで使われている地図はアメリカが上にあって中心にあり，日本で使われている地図は日本が上にあって中心にある」という補足説明をその場で加える必要があり，最終的にオーストラリア（ニュージーランド）という答えが出てくるまでにかなりの時間がかかってしまったので，最後の発問を十分に交流する時間がなかった。しかし，世界地図を１つに統一した方がよいかという発問に対しては，統一した方がいいという意見の子どもが３人で，残りは異なっていた方がいいという意見であった。その理由としては，授業の意図である「色々な見方があるから異なっていた方がいい」「言語や文化が違うから地図も違うと思う」から，「上下逆の地図は逆さまにすると結局一緒になるから１つで構わない」や「地球は丸いから１つの地図に表すことは難しい」など，実に多様な意見が出された。授業全体の流れとしては，こちらが発問して子どもに考えさせる場面が多かったので，作業や活動を入れるとメリハリが出て尚よかったのではないかと思われる。

【自己変容について】

外国人である自分がアメリカの子どもに対して，世界には様々な見方があるということを教えることに価値があるということにこだわったことが授業実践の何よりの原動力であったと思うので，やはり授業は目標が大切であるということを再確認した。加えて，授業をするにあたって必要な点，留意すべき点は誰を相手にしようと同じであることにも気付いた。また，つたない英語であったが，授業以外の時間も含めて，こちらが話しかけると心を開いて聞いてくれたり笑顔で答えてくれたりしたアメリカの子どもに本当に助けられた。以前イギリスに留学した際に，「Personalities are more important than nationalities」という感想を持ったことがあったが，外国の方とかかわるときも，日本人と外国人である前に人と人なのだということに改めて気付き，まずは人とかかわりたいという気持ちを持つことが大切であるということを感じた。

第５学年　書道科／国語科「筆を使って，漢字を書いてみよう」

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修　庄　野　修　一

１．ねらい

本授業のねらいは，筆を使って漢字を書くという活動を通して，漢字や日本の文化である書道に親しみ，そこから書道のよさである，文字を芸術とみることや，筆で書く心地よさ等を感得させることである。

２．概　要

60分の授業時間を頂き，５年生に書道の授業を行った。最初に，自己紹介を行い，学校のイメージや感想を話した。

次に書道という日本の文化の紹介と，その使われている道具（文房四宝）の紹介を行った。さらに，書道では漢字が表現の対象であることから，漢字についての紹介を行い，子ども達とたくさんの漢字について学ぶ活動を行った。

そして，実際に筆と墨で漢字を書く活動を行った。初めて，見る文字，使う筆にも関わらず，ほとんどの子ども達は字形を上手く捉え，中には，そっくりに書く子どもの姿も見られたことは，大変驚いた。

出来上がった作品の鑑賞会をするはずであったが，時間の都合上，行うことができず書道のよさをこども達が考える時間がなかった。そのため，最後に，口答で子ども達に，書道のよさと，書道という日本の文化を忘れないでほしいということを伝え，授業を終えた。

３．成果と課題

日本の子ども達は，書写の授業により，ある程度，筆や漢字を書くことに親しんでいるが，米国の子ども達は，初めて筆を扱い漢字を知る。その点を，配慮して一時間の授業でまとめていくということは，大変難しいものであった。授業全体を通して，子ども達が書道のよさを考える時間がなかった点が大きな反省である。漢字の形や意味を知る活動や，作品を制作する活動には，力を入れたのだが，本来の書道のよさを全体で共有する時間がなかった。その点について，授業後，担任の先生に作品を鑑賞する時間や，感想を共有する時間をしてほしいという趣旨を伝えたが，授業者，自らがそういった時間を授業内にもてるような授業案を作る準備が必要であったと感じた。

また，文字を書く活動では，ほとんどを机間指導により個別に書く様子から支援をしていったが，書く姿勢や筆の持ち方等を，もっと事前に丁寧に全体指導を行っておく必要があった。漢字を紹介する時間では，日本語での読み方やそれを全体で言うという時間や筆順を全体で確認するという時間を加えることで，もっと漢字への理解が深まったと感じた。

【自己変容について】

本研修を通じて，痛烈に実感したことは，自分のコミュニケーション能力の低さである。語彙や文法力の不足というハンディはあるが，そのようなことに恐れずに伝えようとする気持ち，姿勢，勇気が大切だということを，本研修を通じて学んだ。この視点を普段の生活でも意識し，大切にしていこうと思う。また，英語で授業をやり遂げたことは，大きな自信となった。

第2・3学年　音楽「『静寂』を感じて『日本の音』を楽しもう!!」

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修　矢　野　和佳子

1．ねらい

本授業のねらいは，「音」という面に注目し，日本で大切にされている音文化を紹介することを通して，日本に対する興味をもってもらうことである。今回，特に紹介する日本の音文化としては，日本で大切にされている「静寂」と，竹や木によって作られている楽器や音の出るおもちゃである。

「音」や「音楽」は，世界中に存在しているものであり，国境や言語の壁を越えて誰もが共有することのできるものである。しかし，国や地域によって好まれる「音」や「音楽」には特徴がある。また，楽器やおもちゃの素材も異なってくる。日本の伝統的な音文化を知ることにより，自国の音文化にも興味をもてもらいたい。

2．概　要

まず，「静寂」の状態をつくるために，音を出した後余韻の残るような楽器（今回はシンバル）を使用し，音を出した後，その音が消えたと感じた瞬間に手を挙げてもらうという活動を行った。どんどん消えていく音に注目することで，自然と子ども達が落ち着き「静寂」の状態をつくることができると考えた。次に，「静寂」の状態で，周りの音に耳を傾けてみるという活動を行った。「静寂」の状態では，それぞれの耳が普段よりも研ぎ澄まされた状態になる。そのため，普段，自分の周りにあるのに意識しないような音も聴くことができると考える。実際に，聴こえた音をたずねると，エアコンの音や通りの車の音をはじめ，自分の呼吸の音や心臓の音，友達が咳をする音や移動した音など，様々な音を聴くことができていた。

この授業のメインは，聴こえた音がどの楽器やおもちゃから出た音かを考えるという活動である。そのために，日本の伝統的なおもちゃや楽器の写真を準備しておき，授業者が隠れて出した音がどの写真に写っているものから出たのか予想してもらう。子どもの予想を聴いた後，実物を示すとともに，日本での使われ方や日本の曲なども紹介した。この活動の応用として，写真の楽器やおもちゃがどのような音を出すのかを予想した後に，実際の音を聴いてみるという活動も行った。

最後に，日本の伝統楽器の一つである「笙」を紹介し，日本の伝統楽器の特徴として竹や木でつくられているものが多いこと，それぞれの地域で音楽には特徴があることを伝えた。その上で，音楽はどんな人でも共有できるものであり，色々な音楽を聴いてもらいたいということで授業を締めくくった。

3．成果と課題

予想していた以上に子ども達が大人しく，「静寂」をつくるという活動を効果的に使うことができなかった。また，「笙」が和音を演奏する楽器ということもあり，音を紹介するだけにとどまってしまった。しかし，子ども達は，日本のおもちゃや楽器に大変興味をもってくれており，積極的に発言をしたり活動に参加してくれたりした。音楽は，言語という壁を越えて伝わっていくということを実感できる授業であった。

【自己変容について】

今まで，アメリカの子ども達は日本の子ども達とは全く違う性質をもっているものと思っていたが，それは間違いで，国は違えど根底にあるものは同じなのだということを実感した。アメリカの教育を体感する中でその良い面が見えてくると同時に，今まで意識しなかった日本の教育の良い面も考えることができた。外国の良いものは取り入れつつも，元々日本がもっている良い部分を活かせるような教育を考えていければと思う。

第５学年　算数「五目並べ」

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修　鷲　見　勝　司

１．ねらい

・五目並べに親しみを持つ。

・白石又は黒石を五個，横か縦か斜めに先に並べた方が勝ちとなることを理解する。

・どのように黒石又は白石を並べていくと勝てるか考えることが出来るようになる。

２．概　要

授業のはじめ碁盤を書いた模造紙を黒板に掲示して「これはなんですか。」と児童に尋ねた。すると，「Fishig Net」，「Graph」等の返答があった。指導案では次にcircle card（白，黒の碁石の代わり）を順番に置いていって，蛇の形をつくる計画であったが時間がないので省略した。

次に「I' ll explain how to play Gomoku-Narabe game.」と言って五目並べのやり方の説明に入った。No.1と書いた模造紙に13路の網目を書いて，黒石が縦に５個並び，白石が縦に５個並んだものを示して「Line up in a vertical line like this.」と言って黒板に掲示した。次にNo.2と書いた模造紙に13路の網目を書いたものに黒石が横に５個並び，白石が横に５個並んだものを示して「Line up to the side like this.」と言って黒板に掲示した。次にNo.3と書いた模造紙に13路の網目を書いたものに黒石が斜めに５個並び，白石が斜めに５個並んだものを示して「Line up diagonally」と言って黒板に掲示した。そして次のNo.4ではNo.1からNo.3までの纏めとして縦，横，斜めに白石，黒石が混ざり合ったもので，あと１つ黒石をある場所に置くと黒を持っている人が勝ちになるものを示して「Where do you put on a black circle card to make line with 5 black cars？」と尋ねて，児童に挙手させ，１人の児童を指名してblack circle card（黒，石の碁石の代わり）を置かせてみると正解だった。同様のことをNo.5ではWhite circle cardでも実施した。No.4では白，黒の碁石に置いていった順番に番号をつけていたがNo.5ではつけなかったにもかかわらず正解だった。

そこで，３人が１グループになるように言って碁盤，碁石，得点表を教師のところへ取りに来させた。そして一人は審判員で勝った人に○印，負けた人には×印をつけ，あとの２人が五目並べのゲームをする。４回対戦して終わりとするように言った。五目並べのゲームを１人４回するのに約10分かかり，どんなストラテジーなら相手に勝てるか考える授業展開まで進められなかった。

３．成果と課題

五目並べに興味を示したのは良かった。しかし五目並べのゲームをしている時，机間巡視をして見ていると勝つ者は勝ち続け，負ける者は負け続けている児童がいるグループがあった。勝ち続ける児童はどのように白石，又は黒石を置けばよいのか理解してるのではないかと思われる。又負け続けている児童は，五目並べのゲームのルールは理解したが，勝つ方法が分からないかルールをしっかり理解してないからであろう。またストラテジーを考える授業展開まで進められなかったことが原因の１つであると思われる。次に天元，碁盤，碁石等の日本語を使いながら授業を進めたが解説を十分にすることができなかったが児童に五目並べゲームをするセットをプレゼントすることを伝えると大変喜んでいたことから，ゲームをやりたい気持ちにさせたのは確かであろうと思われる。

【自己変容について】

自分のアイデンティティー，研究目標をしっかりと持っていることが大切です。それをベースにして異文化体験，教育観，自分自身を振り返ってみると，全ての異文化も教育も人がつくりだしたもので，似ている物がたくさんあるが詳しく見ていくと違う物もあることが分かった。

次にアメリカは大変広い国土なんだなあということでした。その影響を受けてアメリカの人は少々のことにはこだわらない性格の人が多いのだと改めて実感した次第です。

第５学年　言語「地球の人も言葉もつながっている！－日本の文化と言語－」

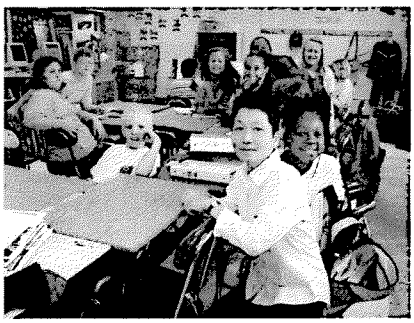
教育学研究科国語文化教育学専攻言語文化教育学専修　吉　浪　徳　香

１．ねらい

本授業のねらいは，「世界が平和であればこそ人や文化や言語も交流し，また互いの文化や言語を尊重し合えることに気づくこと」である。言語は，その国や土地の歴史や文化を背景にして生まれ，そこに暮らす人々によって育まれる。日本の歴史や文化を背景にして生まれた仮名文字や豊かな言葉を，文字や写真と共に紹介することで，日本の豊かな自然や文化や，人々が自然と共生していることを伝える。さらに，簡単な日本語を紹介し，言葉をとおしてコミュニケーションを図る。

その日本の仮名文字は中国の漢字から発明された。また日本語の中には，「コミュニケーション」など，英語から取り入れられた多くの外来語も存在し，「judo」など日本語が英語の中で使われている言葉もある。世界中の国々の人々が交流し，それに伴って「言葉」も交流し，影響をうけ合ってつながっていることを伝える。そして，世界が平和であればこそ人や文化や言語も交流し，また互いの文化や言語を尊重し合えることに気づかせる。以上のようなねらいで，本単元を設定した。

２．概　要



まず日本語の挨拶の言葉を教え，コミュニケーションを図った。次に，日本語のかるたとりを行った。代表の児童が発音を聞いてカードを選び，写真を見ながら一緒にその日本語を発音した。「いね」「ゆかた」など日本の自然や文化を感じられる言葉を選び，思考の手助けになるようローマ字を添えた。生徒達は，積極的に挙手し，意欲的に活動に取り組んだ。次に，この仮名文字が漢字から発明されたこと，英語も外来語として，たくさん日本語の中に入っていることを伝えた。このように地球の様々な国の人々が交流し，それに伴って言葉もグローバルに交流しており，その交流には「世界が平和であること」という条件があることに気づかせた。「世界が平和でなければ，人は自由に交流できず，互いの文化や言語の違いを理解し，それを尊重し合い学び合い交流させることはできないこと」を伝えた。そして，日本の子どもが絵を描いた絵手紙に，児童が筆ペンで好きな日本語を書いた。日本の子どもが絵を描き，米国の子どもが日本語を書いた合作である絵手紙を子どもたちに贈り，感謝の言葉を述べて授業を終えた。

３．成果と課題

成果は大きく次の３点である。「世界が平和でなければ，人は自由に交流できず，互いの文化や言語の違いを理解し，それを尊重し合い学び合い交流させることはできない」というメッセージを伝えたこと。合作の絵手紙をとおして「平和」というメッセージが息づくことが期待できること。児童が日本の文化と言語に興味・関心をもったこと。課題は，児童が書いた絵手紙の言葉や活動から，交流やまとめにつなげることである。授業で大切にすることは，どの言語で授業をする場合でも変わらない。また，この体験をこれからの実践につなげることが大きな課題である。

【自己変容について】

私は，今回の実地研究の授業や多くの人々との出会いをとおして，人々は互いの違いを理解し尊重した上で，つながり合うことができると強く実感した。逆に，つながり合うためには，互いのことを学び，理解し合うことが大切であると感じた。そのために「国際交流」や「異文化体験」の意義がある。また「相手に心をひらくこと」と同時に，「言葉」の大切さを再認識することもできた。これから出会う生徒達にも，「言葉」と「体験」の大切さ，広い視野で見ることの大切さ，さまざまな違いを超えて人々が交流し合い，コミュニケーションし，理解し合うことの大切さを伝えていきたい。この体験をとおして，より実感を伴った言葉で，子どもたちに語っていくことができる。また，ヒロシマに住んでいるものとして，「平和」というメッセージを忘れてはならないと改めて感じた。

第７学年　総合的な学習「Ｔシャツデザインを通した平和理解」

教育学研究科教育学専攻　小　野　智　子

１．ねらい

本授業のねらいは，作品の制作や比較を通して平和についての考察を深め，自国の文化や日本の文化への理解を高めることである。

２．概　要

はじめに，本時の柱となるデザインについての認識を深める活動を行った。質問をしながら，デザインは時にメッセージや意味を含んでいるということを全体で確認していく作業である。その際，「日本語」，「制服」なども例に挙げ，日本文化の紹介も簡単に行った。

これらのことを踏まえた上で，実際に「平和」をイメージしたTシャツをデザインしてみようと投げかけたが，生徒たちの間に戸惑いが感じられたため，先に日本の中学生の作品を紹介することにした。事前に日本の中学生らに平和Tシャツのデザインをさせていたのである。作品例を見て要領を得たことで，生徒たちは作品作りに取り掛かりはじめた。

作品完成後，幾人かの生徒に作品を紹介してもらい，特徴や感想などを述べてもらった。それからクラス全体で今日の授業を簡単にまとめ，授業の結びとした。

なお，作品制作の際，生徒たちから日本語についてなどの質問があがってきたため，他のメンバーにサポートに入ってもらいながら授業を行った。

３．成果と課題

今回の授業で大事にしたかったのは，「平和というものは，いったい何だろう？」と考えるきっかけをあたえること，そして，作品の制作や比較を通して，「平和というのは，難しいものではなく，相手のことを知りたい，知ってもらいたい，仲良くなりたいということでもありえるのではないだろうか？」と投げかけるということであった。しかし，肝心の結びの場面でそれをうまくクラス全体で考えることができなかったように思う。また，前に立って作品を紹介してくれた生徒の発言を十分に拾うことができなかったのも心残りである。

とはいうものの，生徒たちはときおり日本についての質問を挟みながら，熱心に作品を制作してくれた。また，作品発表の際は，積極的に作品を説明してくれたり，前に立つ勇気が出せないでいる子どもに対して，クラスメイトが後押しをしてくれたりと，非常によい場面も多くみられた。その様子が印象的であり，このようなクラスの雰囲気ついて詳しく調べてみたいという感想を持った。

作品の制作に関しては，事前に日本の中学生に制作してもらったときと似たような反応だったのが興味深かった。生徒たちはそれぞれ，互いの国に興味をもっているようである。作品の内容についても様々な相違点や共通点が見られ，こちらも興味深かった。

【自己変容について】

「やっぱり授業って面白い！」「やっぱり子どもってすごい！」

遠い異国の地で，再認識させられた。確かに制度上，組織上違いはたくさんある。もちろん，そこに興味を抱いたのも事実である。しかし，なぜか私が一番心に残ったのは「あ，一緒。」ということであった。そして，この発見を一番大事にしたいなと思っている。比較というと，ついつい違うところばかりに目がいってしまいがちであるが，この「同じ」という点を大切に深めていきたいと考えている。今回，このような貴重な体験をさせていただき，本当に感謝しています。

第４学年　Culture Education <Arts and Crafts> Let's enjoy! Let's exchange! The「Origami」

東広島市立三ツ城小学校　榎　並　愛　子

１．ねらい

本授業のねらいは，日本の伝承文化である「折り紙」の楽しさやそれにまつわる風習を紹介するとともに，「折り紙」を通して日本とアメリカの子どもたちの心の交流を図ることにある。具体的には次の３点である。

①「かぶと」や「鶴」を折ることを通して，折り紙の楽しさを味わうことができるようにする。②日本には「かぶと」や「折鶴」に喜びの気持ちや願いを込める風習があることを知らせる。③「折鶴」とメッセージを通して，異なった国の子どもたちどうしが心を通わせることができるようにする。

２．概　要

(1) 日本の子どもたちに折り紙文化が根付いていることを知らせ，折り紙に興味をもつことができるように，本校の５年生と一緒に作ったDVDや折り紙作品集を見せた。さらに，折り紙で何かを作ってみたいという意欲を喚起するために，作品集を見せながら「これは何でしょう」というクイズを出した。

(2) 「かぶと」に興味をもつことができるように，「かぶと」をかぶった本校の５年生の子どもたちの写真を見せた。日本には子どもたちの健やかな成長を願って「かぶと」を折る風習があることを知らせ，日本から持参した大き目の広告紙を使って一緒に「かぶと」を折った。

(3) １ｍ四方の紙で折った巨大折鶴を提示し，折りを解いていくことで一枚の正方形の紙から折鶴ができることを知らせた（写真１）。子どもたち一人一人には折り線を描いた折り紙を配り，ひとつひとつの工程を一緒に折りながら「鶴」を完成させていった。

(4) 本校の５年生の子どもたちからのメッセージと折鶴を封筒に入れたものを一人一人に手渡し，返信のメッセージを書いてもらった。

３．成果と課題

○全員に鶴を折ってもらいたいという願いをもち，様々な準備物を用意した。準備したものは，それぞれの場面で子どもたちの関心を高めたりかぶとや鶴を折る際の助けになったりした。

○本校の５年生からの折鶴とメッセージはとても喜んでくれた。返信のメッセージの中には，「いつか会いに行きたい」「文通しませんか？」「あなたの好きなことは？」など，またこちらから手紙を送りたくなる内容のものがたくさんあり，心の交流が芽生えた。

●準備物に頼りすぎて，的確な指示やアドバイスをすることができなかった。また，鶴を折ることのみが目的のような授業を展開してしまい，「折鶴」のもつ文化的背景に十分に触れることができなかったため，日本文化を伝えるための授業としては不十分であった。

【自己変容について】

アメリカでは，日常のあいさつから笑顔が生まれ心が通い合うことを実感した。先生方からは，子どもたちの学ぶ姿勢や態度を精一杯ほめることで，一人一人が学ぶ喜びを味わい，意欲をもって伸びていくことを学んだ。お互いの国の文化や社会には違いがあり，相手を理解するということは言葉で言うほど容易ではないと思う。しかし，お互いに違う部分があるのはあたりまえであり，それを受け入れようとするからこそ，自分が豊かになれるのだと考えられるようになった。

4．体験型海外教育実地研究についての評価

(1) 大学院生等による授業についての評価

2007年度米国ノースカロライナ州において実施された授業の一覧は次のとおりである。

	学年	教科等，題材・テーマ
A	3	総合（異文化間教育） Let's communicate by gesture!
B	3	音楽科 静寂を感じて「日本の音」を楽しもう!!
C	4	Culture Education <Artsand Crafts> Let'senchange! The "Origami"
D	4	図画工作科　Paper Plane
E	5	異文化理解 Japanese culture FUKUWARAI☆
F	5	社会科　色々な地図
G	5	書道科／国語科 筆を柄って，漢字を書いてみよう
H	5	算数　五目並べ
I	5	言語 地球の人も言葉もつながっている！ －日本の文化と言語－
J	7	総合　Tシャツを通した平和理解

(教科等名は任意に付したものであり，授業を実施した当該校にとっては教育課程外のいわゆる投げ入れの授業となっている。)

教科等の選択，題材・テーマは，参加者に任されている。学年についても概ね参加者の希望にそっている。

参加者は，日本での事前学習において目標，内容，教材，教具，授業過程などについて協議し，具体的な準備を進めた。また，出発前に英文の指導案を作成し，現地に持参した。現地では，受け入れ校の関係教員と短時間の打ち合せを行い，授業に臨んでいる。参加者は，通訳を介すことなく英語で授業を実施した。

授業構成力，実践的指導力の向上という観点から，授業を通した主な成果は，次の３点に整理できる。

① 教育内容の選択の視点

上掲の一覧表のとおり，実施された授業の教科等の枠組や学年は様々である。しかし，いずれも日本あるいは広島を意識した内容を設定して授業を構成している。各参加者が，遠く米国ノースカロライナ州において授業をすることの意味を吟味した結果として評価できる。(すべての授業が該当)　また，日本や広島を意識した授業は，米国の子どもたちにとって異文化理解であるとともに自文化理解にも繋がっている。(例えば，表内Ａ，Ｆ)

② 学習形態を意識した指導法

参加者は，ねらいに迫るために，個別，小集団，一斉という学習形態を意識した授業を行っている。(例えば，表内のＪ，Ｈ) 学習場面に応じて学習形態を転換することで，海外の指導者と出会い異文化と向き合う中で生じる戸惑いや緊張を緩和するとともに，個別の指導も可能にしている。(例えば，表内のＥ，Ｇ，Ｉ)

③ 理解を助ける教具等の工夫

異文化体験という観点から具体的な活動を取り入れた授業が多く見られた。しかし，これを成立させるためには適切な教具が必要である。多くの授業において，児童の手元の材料の拡大版を用意する，材料に細かい印を付す，実際に手にとって試す場をつくる，などの工夫がなされていた。(例えば，表内Ｃ，Ｄ，Ｊ)

このように，わずか１～３時間の授業実践であったが，参加者の授業構成力，実践的指導力の向上をみることができる。今回の参加者は英会話能力に優れており授業を円滑に進めることができた。その一方で，言葉に頼りすぎる場面も見られた。児童，生徒とのコミュニケーションについては，より多様で具体的な方法を備えることが課題となろう。

(2) アンケートの分析結果

研修中（合計３回実施），研修後に，参加者の意識変容等を問うアンケートを実施した。アンケートから得られた参加者の意識変容に関する記述を意味単位で区切った後，文部科学省教育職員養成審議会第３次答申（1999）の「今後特に求められる資質能力」に示された３つの観点（Ⅰ：地球的視野に立って行動するための資質能力，Ⅱ：変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力，Ⅲ：教員の職務から必然的に求められる資質能力）をもとに分類を行った。また，それらに影響を与えた体験についても同様にアンケートから得

られた記述を意味単位に区切り，調査者が記述の内容に基づいて分類を行った。その結果，「授業実践」，「交流」，「見学」の３つのカテゴリーを抽出した。そこで，「今後特に求められる資質能力」の３つの観点それぞれについて，参加者の得た体験がどのように関連しているのかをまとめ，表１（研修前），表２（研修後）に示した。

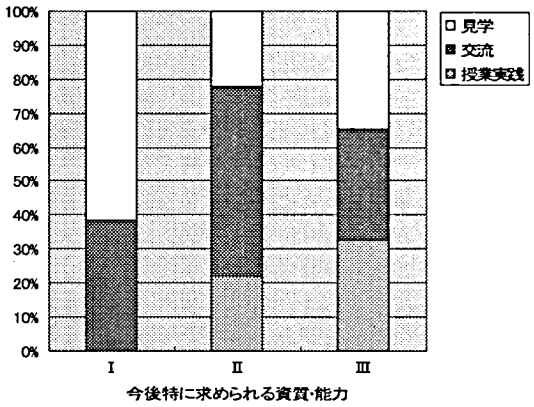


表１　参加者の意識変容と参加者が得た体験（研修中）

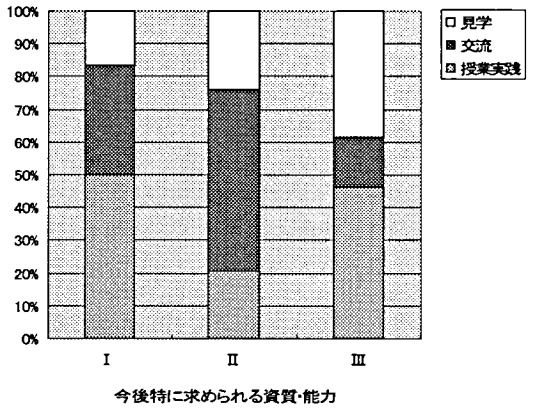


表２　参加者の意識変容と参加者が得た体験（研修後）

（Ⅰ）地球的視野に立って行動するための資質能力について

研修中：学校訪問で子どもの様子や子どもと先生とのやりとりを見て，子どもたち一人ひとりが尊重されていることや，教師の悩み等はどこへ行ってもそれ程変わらないことを感じるようになった。

→人間尊重の精神，人間観，考え方や立場の相違の受容

研修後：人や文化の多様さ，自国の教育といったものを尊重する姿勢が，授業実践を通して育まれたと感じるようになった。

→多様な価値観を尊重する態度，自国の教育を理解し尊重する態度

（Ⅱ）変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力について

研修中：子どもや先生方と関わる機会が多く，その中でコミュニケーション力（特に英語力）が必要とされる場面が多かった。どのようにすれば相手に伝わるのか，どのようにコミュニケーションを取っていく必要があるかを考えなければならなかなかった。

→自己表現力，英語力

研修後：現地の人との関わりの中で，相手を理解しようとし，相手の考え方や特性を受け入れていこうとする態度を日々意識するようになった。

→コミュニケーション力，社会性，対人理解

（Ⅲ）教員の職務から必然的に求められる資質能力について

研修中：先生方の授業を見たり，授業実践をしたりする中で，先生の子どもに対する受容的な態度を学ぶとともに，アメリカと日本の教育との違い，カリキュラム等についての考えを得ることができた。

→子どもの個性を生かす能力，カウンセリング・マインド，教育に関する知識，子ども観

研修後：授業実践では，様々な準備や授業のふり返りをしたことで，よりよい教え方を考えたり，教師としての責任感を感じるようになった。また，子どもとの関わりの中で，子どもへの接し方はどこであっても変わらないと考えるようになった。

→教科指導能力，教員としての使命感，教育観

このように現地の教育に直接触れることができるという本プログラムの特徴が，語学研修や国内での教育実地研究では得られにくい意識変容をもたらすことが示唆された。

５．おわりに

昨年に引き続き第２年目を迎えた広島大学大学

院教育学研究科「体験型海外教育実地研究」は，将来，海外の学校との連携・交流などを推進できる人材育成を行い，さらにそのためのプログラム開発を行うことを目的に実施された。今年度の参加者は，日本側から現職教員・大学院生10名，引率教員4名，そしてアメリカ側からはパートナー校教員3名，そのほかエクスプローリス中等学校およびイーストカロライナ大学教員で，昨年よりも規模が拡大した。広島大学大学院教育学研究科の協定校との人的ネットワークを活用しながら，本プログラムにおいては海外での実地体験を目標に，その事前・事後に多くの時間をかけて授業作りに取り組んできた。その成果として，つぎの3点を挙げることができる。

第1に，参加した大学院生および現職教員の実践的指導力の向上に寄与することができた。日本の文化や事情を全く知らない生徒たちに英語で教えることを前提に，日本文化紹介のための教材を開発し，授業を構想することは参加者にとっては大きな挑戦であった。今回は，日本を紹介するという一方的な授業展開だけでなく，日米との文化比較による教材化，さらには生徒の共同参加を促した体験交流型の授業展開も見られ，さらに実りの多い実地体験になったと思われる。

第2に，授業作り，授業実践を通して，教員としての意識の変容，高まりが見られたことを指摘することができる。日米で同じことが微妙なニュアンスによって伝わらなかったり，日本独特と思ったことが実は日米に共通することが分かったり，まさに疑問と感動のサイクルの繰り返しであった。特にアメリカの教員および教員志望学生との交流を通して双方の教育に対する思いを語り合うことによって，教育の多様性と普遍性を意識すると同時に，参加者自身の教育に対する意識や視点の深まりを涵養することができた。

第3に，今回の交流を通して，個人間のフレンドシップが学校間の交流を通したパートナーシップの推進につながったことが挙げられる。これまでの活動を知って，本センターへの訪問やアメリカ各地の学校からの交流希望も寄せられるようになった。一つの題材，一人の教師，一つの学校でできることは小さいかもしれないが，グローバルな資質や能力，高度な実践力を持った教員によって構築されたネットワークが今後も拡大することが期待される。そしてそれを可能にするようなプログラムの枠組みをほぼ確定することができた。

今後の課題として，日米両国の学期の違いから最適な訪問時期をいつに設定するか，今後，増えてくると予想される海外からの交流希望にどのように対応するか，さらにプログラムへの支援をどこに求めるか，などがある。

最後に今回のプログラム実施に際しては多くの人々および団体の協力があったことを指摘しておきたい。アメリカ側のまとめ役として協力してくださったイーストカロライナ大学教育学部のレッドフォード先生，実習校であったエルムハースト小学校のスザーン先生，G. R.ウイットフィールド校のパム先生，ウオールコーツ小学校のワトソン先生，エクスプローリス中等学校のケビン先生には心よりお礼を申し上げたい。また，多大な助成と助言をいただいた米日財団，さらに実施にあたって支援いただいた広島大学大学院教育学研究科学生支援・教育研究活動支援の両グループにも感謝申し上げたい。

写真3　ECUキャンパスにて

引用文献

小原友行・深澤清治・朝倉　淳・神山貴弥・岩城宇紀・武田由紀子・長江綾子・丸子保子・大里弘美・為重友馨・村島唱子・林万青也・Carolyn Ledford・Suzanne Hachmeister　2007　大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究報告　学校教育実践学研究　13，1-9.

文部科学省　1999　教育職員養成審議会第3次答申